３２－１　山辺ＲＣ　竹俣朋

しあわせの席での緊急対応に思う

何年前のことだろう。私は式典の司会を生業としていた。ホスト企業やファミリー、ゲストに感動を届け、喜んで頂くことが嬉しく、仕事が生きがいだった。

婚礼の司会を担当していたある日のことだ。披露宴が始まると新郎新婦の友人も大盛り上がりで、会場全体が祝福に包まれている。私達スタッフも、さらに盛り上げようと奮闘していた。

披露宴も佳境に入る。会場を一つにする、新婦の手紙と両親への花束贈呈のシーンでは、皆の頬を涙が伝う。最高の拍手に送られて、新たな旅立ちだ。扉が閉まったところで、新郎新婦からゲストへのラストの贈物がある。披露宴の様子を撮影した出来立ての動画の上映だ。テーブルのあちこちで笑いが沸き上がる。

そんな中、後方で物音がした。スタッフが静かに動く。「酔っ払った誰かが、何かを倒したかな」、そう思いながら暗がりの中で目を凝らす。普段とは違う慌ただしさだ。「ただ事ではない」、そう判断した私は、マイクを手に音のした方へ歩み寄る。

親族の方が一人倒れている。意識がない。近くの方に場所をあけるよう、そっとお願いをする。救急車も手配する。

動画が終わり、会場内が明るくなれば、この状況を全員が知ることになる。「ゲストのお見送りは救急搬送後」と、スタッフと瞬時に取り交わす。この場を収めるのは、私のコメントのみだ。

動画が終わった。ゲストからの大きな拍手。会場が明るくなる。私は司会台には戻らず､それでも何事もなかったようにエンディングのトークを行う｡そして、一呼吸おいて現状を告げる。ゲストには患者の搬送後に席を立つようお願いをする｡誰をも不安にさせないよう､細心の注意を払っての言葉選びと雰囲気作りだ。

何事もない披露宴では、誰も司会の言葉など気にせず、自由な動きをする。でも今回は違う。私の発する言葉通りに皆が動いている。新郎新婦の幸せと同時に救急車の早い到着を願い、親族の方の回復を祈りながら、誘導のコメントに耳を傾け、粛々と自分達のなすべきことを行っているようだ。

救急隊員が到着し、その様子を静かに見守っているゲスト達。担架で運ばれた親族。ロビーの様子も落ち着き、送賓の準備が整った。

長らく待たせたことを詫び、親族の無事を願いつつ、おひらきの口上へと繋げることができた。会場は予想を超える大きな拍手に包まれた。突然の場面でも淀みなく動くスタッフへの、労いの気持ちも込められていたように思う。

大勢の人が集まる中でも冷静に対処できるのは、日頃の努力の積み重ねと、スタッフとの連携、そして信頼関係だ。スタッフを信頼しているから任せられる。任せられるから自分のすべきことに集中できる。だから、緊急事態であっても、感動を生むことができるのだと思う。

全てを終え、両家から感謝の言葉を頂いた。スタッフは「今日の司会があなたでよかった。助けてくれてありがとう」と言ってくれた。もちろん私も「皆と一

緒だから乗り越えられた」と返し、ハイタッチを交わしている。司会業を誇りに思える出来事であった。